

第1章 交通事故で家族を亡くした 子どもの支援に関するシンポジウム

．目的

交通事故で家族を亡くした子どもの支援に関するシンポジウムは、交通事故で家族を亡くした子どもの支援のために、必要な支援や課題等の意見を集約し、子どものみならず、その周囲にいる保護者や支援に携わる方等に対して情報を発信することを目的として開催された。

．開催概要

1．シンポジウムの概要

シンポジウムは、交通事故で家族を亡くした子どもに焦点を当て、精神的支援に関する専門家の講義、遺族のお話、内閣府における取組等が紹介された。なお、一般の参加も可能とするオープンなシンポジウム形式にての開催は、内閣府の交通事故被害者サポート事業として初めての試みであったが、約 140 名の参加を数え、大変盛況であった。

2．参加者

シンポジウム当日は、独立行政法人自動車事故対策機構（NASVA）、公益財団法人交通遺児育英会、政府関係者、専門家、交通事故被害者、被害者支援センター等各支援団体、教育関係者、被害者支援に関心のある学生、一般の方々等、約 140 名の参加となった。また、マスコミの関心も高く、マスコミ関係者の参加も多数見られた。

3．日時

平成 26 年 1 月 11 日（土）13：00～16：30

4．会場

女性就業支援センター（4 階ホール）

東京都港区芝 5-35-3



5. プログラム

まず、専門家より基調講演をいただき、続いて遺族の方 2 名より御自身の体験についてお話をいただいた。その後、専門家にコーディネーターとなっただき、パネリスト（子どもの頃に家族を亡くした方）3 名を招きパネルディスカッションを行なった。なお、遺族の方については本人のご要望を尊重して、一部の方については匿名としている。

図表 1-1 シンポジウム プログラム（敬称略）

時 間	担 当	内 容
13:00	杵淵 智行 内閣府大臣官房 審議官	開会及び主催者挨拶
13:10～14:10	藤森 和美	基調講演「子どもと死 - その理解と支援 - 」
14:10～14:50	井上 郁美 被害者遺族 A (匿名希望・女性)	講演 「家族を亡くした子どもの親として - 子育ての悩みや支援について - 」
14:50		休憩
15:00～16:20	(コーディネーター) 藤森 和美 (パネリスト) 中谷 文香 仲沢 悠希 坂井 翔一 井上 郁美 被害者遺族 A (匿名希望・女性)	パネルディスカッション 「子どもの頃に交通事故で家族を亡くすということ」
16:20～16:30	山崎 房長 内閣府政策統括官付 参事官	政府の交通安全対策について 閉会の言葉

．実施内容

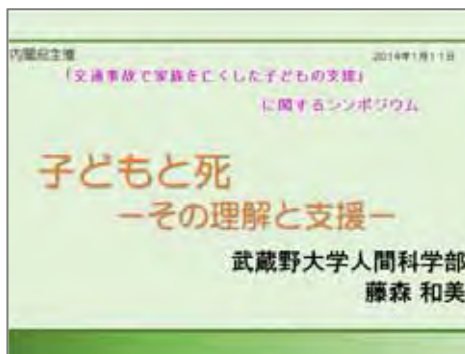
1．基調講演「子どもと死 - その理解と支援 - 」

武蔵野大学人間科学部 藤森和美教授より、「子どもと死ーその理解と支援ー」についての基調講演が行われた。基調講演内容の要旨は、以下のとおりである。なお、内閣府においては、その講演内容の動画を収録したDVDを地方公共団体の交通安全担当部署や交通事故被害者支援団体等に配付している。

〔基調講演要旨〕武蔵野大学人間科学部 教授 藤森 和美

「子どもと死」に携わったきっかけ

「子どもと死」に携わるきっかけは、1993年に発生した北海道南西沖地震であった。子どもを亡くした保護者、保護者を亡くした子どもたちなど、自然災害がもたらした被害によって遺族となった方々と出会った。1995年の阪神淡路大震災では、衝撃的な体験をした方々、衝撃的な場面を目撃した方々へのケアが必要ではないかと考えた。その後、子どもを巻き込む事件や事故が発生する中で、子どものケアに関する緊急支援チームを立ち上げてきた。現在は、家庭、通学路、学校の中で子どもたちが事件や事故に遭った場合、学校からの要請を受けた上で、教師や保護者、遺族の方、被害者の方の心理的サポートを行なっている。本日の基調講演では子どもと死について、私が心理学的に感じてきたことをお話ししたい。



死別体験が子どもに与える影響

一般的に死別体験には、事故や事件、病気など、様々な原因がある。子どもの死別体験についても、様々なものがある。親が自殺した、DVで片方の親が片方の親を殺した、きょうだいが死んだ、友人が死んだなど、死別した原因や相手は、多種多様である。それぞれの死別体験の中で、子どもたちはいろいろな体験をするが、特に児童期以降の子どもの死別体験というものは、どのようなものであってもその影響は大きい。

緊急支援と死
・親の死
・兄弟・姉妹の死／その他家族・親戚の死
・友人の死
・先輩や後輩の死
・交際していた人の死
・教員の死
・その他（タレントや有名人の死など）

「相手が突然亡くなる」という事実は、子どもに大きな影響を与えるのである。緊急支援の現場では、かなりの頻度で子どもを巻き込む痛ましい事件、事故が発生している。しかし、その事件や事故の後に、遺族となった子どもやその保護者がどうなっていくのか長期的に見ていく、またサポートしていくというシステムは、現在の日本ではまだ十分ではなく、非常に難しい課題がある。

死の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・病死（着取りのある場合） ・突然の病死 ・自死/自殺 ・交通事故などの事故死 ・犯罪被害による死 ・家庭内の殺人（DV被害）

子どもの発達段階と「死」への理解

〔乳児期〕

幼い赤ちゃんの場合は、大切な対象が亡くなっても、代わりに甘えられる、ミルクをくれる、おむつを換えてくれる人がいれば、生き延びることができる。ミルクの付いた針金のサルと、暖かい毛布でくるまれた針金のサルに、アカゲザルの赤ちゃんの世話をさせるという有名な実験がある。アカゲザルの赤ちゃんは、ミルクを飲むために針金のサルに行くが、ミルクを飲み終わった途端、すぐに暖かい毛布のサルに行き、しがみつく。生きる手段である栄養を取るために、そういった行動が身に付いている。実験では、ミルク付の針金ザルで育てた赤ちゃんは早死するが、一方で毛布の針金ザルで育てた赤ちゃんも、大きくは育つが、大人になった時にコミュニケーションができず、集団に入ることはできないことがわかった。人間の赤ちゃんの場合も、依存対象を失った時には、次の依存対象を見つけることで、生き延びることはできるが、私たち人間はサルより進化しているため、愛着行動が十分に育っていかなければならない。その愛着行動が十分に育つためには、悲しむということも、非常に重要なことなのである。

喪失による悲嘆
<ul style="list-style-type: none"> ・愛着の対象を失った悲しみ 幼い子どもは依存対象を失うことになる ・自己中心的な認知で、「自分のせい」「おしおき」という理解をする特徴がある ・代替の愛着の対象者がいるかいないかで悲嘆の大きさが変化する

〔幼児期〕

幼児になると、死について自己中心的な認知方法で理解するようになる。母親や父親、きょうだい亡くなってしまったのは自分のせいではないのか、自分が悪いことをしてしまったから、その「おしおき」として、家族に会わせてもらえないのではないかとといった理解の方法である。この時期の子どもは、基本的に自己中心的な考え方をする発達段階にあり、まだ言語が十分に発達していないため、言語化はできないが、心の中でそのように思う傾向を持っている。私の娘が3歳の時、私は急にお腹が痛くなった。まだ幼かった娘は、痛がる私にこう言った。「私がお母さんのお腹から生まれてきたので、私が悪いの。」これは、非常に自己中心的な考え方であるが、この時期に見られる自己中心性というものは、良い意味でも悪い意味でも、子どもの発達の段階で出てくるものである。幼児期の子

どもは、代わりの愛着の対象がいるかいないかで、悲嘆の大きさに影響すると言われてい
る。大切な人が亡くなった時に、子どもが次に頼りにする大切な人たちの表情や感情が、
彼らが悲嘆のプロセスやトラウマから立ち直るための、大きなサポート資源となる。

この時期の子どもの死に関連する体験がトラウマ
になるかどうかは、その死の状況が凄惨であったか
どうか、またそれを目撃したかどうかが大きく影響
する。したがって、子どもが事故や事件に遭った場
合、なるべく現場を見せないようにすることが非常
に重要である。大人が子どもを守るためには、事件
や事故の現場に子どもをさらさないように、十分に
配慮する必要がある。

世界中の宗教や民族の中には、精霊崇拜、万物に
精霊、神が宿っているとして、アニミズムを信仰し
ている人々がたくさんいるが、子どもたちも同様で
あり「幼児期のアニミズム」という世界観、つまり
「全てのものには命がある、動くものには命がある」
という考え方である。幼い子どもがおもちゃを乱暴
に扱った時など、母親が「ほら、おもちゃが痛い痛
いって言っているよ」と言って生き物のようにして
教えると、子どもがそのおもちゃを乱暴に扱うのを
やめるとするのは、アニミズムの考え方を持っている
がゆえに、子どもがそれを生き物のように信じて
いるからであると考えられている。

幼稚園や保育園で、子どもたちが「ごっこ遊び」
をしている光景がよくみられるが、「ごっこ遊び」
は、この時期の子どもたちがモデルを見て学習して
いくための、非常に有効な遊びである。非常につま
らぬ怖い体験をした子どもたちにも、「ごっこ遊び」を
する傾向がみられるが、この場合は、恐怖体験が頭
の中から抜けきらず、そのことにしか興味を持たな
いため、それを再現しようとして「ごっこ遊び」を
すると考えられている。健全なモデルの学習、再現
としての「ごっこ遊び」なのかどうかを見極めるの
は難しいが、ひとつのポイントは「子どもが楽しんで
いるかどうか」である。ユーモアを持って遊び、
「楽しかった」となっていれば良いが、遊んだ後で

目撃によるトラウマ

- 死の状況が、凄惨であるかどうか、それを目撃したかによって、トラウマとなるか否かが影響する
- 死者が非常に身近な人かどうか
- ひとりほっちで目撃したかどうか

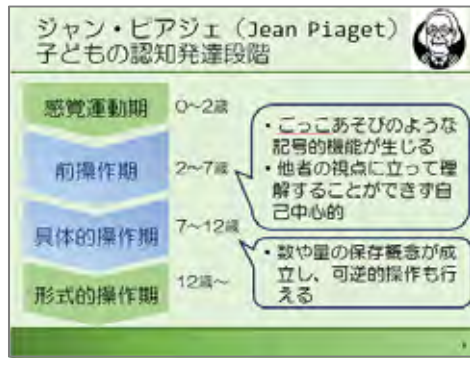
死の理解と子どもの認知発達

- 幼児期の子どもは、アニミズム的な世界観を持っている
- 成長に伴って理解の仕方が変化する
「すべてのものに命がある」
→ 「動くものには命がある」
→ 「自分の力で動くものには命がある」
→ 「生物だけに命がある」

アニミズム (animism)

- 精霊崇拜
- 万物に精霊ないしは神が宿っているという考え方、ないしは信仰
- ジャン・ピアジェは：
認知的な思考の発達段階説の中で、感覚運動期（0-2歳）と前操作期（2-7歳）の段階にある子どもは、自我未分離の自己中心性を脱却できておらず、アニミズムの思考形態を持っていると考えていた

ジャン・ピアジェ (Jean Piaget) 子どもの認知発達段階



The diagram shows four stages of cognitive development in a vertical stack:

- 感覚運動期 (Sensory-motor stage):** 0~2歳. Characteristics: "ごっこあそびのような記号的機能が生じる" (Symbolic functions like pretend play appear) and "他者の視点に立って理解することができず自己中心的" (Cannot understand from others' perspectives, self-centered).
- 前操作期 (Pre-operational stage):** 2~7歳.
- 具体的操作期 (Concrete operational stage):** 7~12歳.
- 形式的操作期 (Formal operational stage):** 12歳~. Characteristics: "数や量の保存概念が成立し、可逆的操作も行える" (Conservation concepts of number and quantity are established, and reversible operations are possible).

も不安で怖くなり、満足していないという場合は、もしかすると、それはなんらかの症状の可能性がある。

〔児童期〕

小学生になると、抽象的なことを知的に考えられるようになる。例えば、コップ一杯の水を、小さいコップ、大きいコップそれぞれに入れたとしても、量は同じだということが理解できる。そのような知的な理解力が発達するこの時期の子どもは、「死んだら、もう戻ってこない」ということが、ある程度理解できるようになる。しかし一方では、普遍性や不動性が、まだ足りない時期である。母親が事件の被害に遭って亡くなった小学校3年生の女の子は、言語的な発達はやったため、母親が亡くなったことはよくわかっていたが、6年生のお兄ちゃんは抑うつ状態になってしまった。女の子は「お母さんは死んでしまった。お葬式の時にはちゃんとさよならを言う」と言うなど、周りは「妹のほうがしっかりしている」と思っていたが、彼女は「死んだら戻ってこない」ことがわかっていない部分があったようで、死んだ母親が「もしかすると電話に出るのではないか」と思い、母親の携帯電話に何千回と電話をかけ続けるようになった。そしてもう母親は電話に出ないということが、彼女の中でわかった時、彼女に「目が見えない」という症状が出てきた。実際に目は見えていて、学校にも行っていたため、大学病院で検査をしたが、目の異常があるわけではなかった。神経科を受診した時初めて、祖母から「実はこの子は母親が殺された現場にいた」ということを聞かされた。つまり、彼女の「目が見えない」症状は、見たことを「信じたくない、現場を見たくない」という意味だったのである。児童期の子どもにとっての「永遠」は、大人が思っているものと違ふと感じたケースであった。

死の理解	
<ul style="list-style-type: none"> ・児童期になる頃には、死の不可逆性を理解できるようになるが、まだ死の普遍性や不動性の理解は足りない ・死は特別な病気や事故によって起こると考えたり、自分には死は訪れないと感じる場合もある 	
不可逆性・・・	死んだら生きかえらない
普遍性・・・	すべての者が必ず死ぬ
不動性・・・	死んだら動かない

子どもの発達段階と感情表出

〔乳幼児期～児童期〕

乳幼児期の子どもの感情表出については、「快と不快」という非常にシンプルなものである。おむつが汚れたら泣く、お腹が空いたら泣く、泣けば母親が世話をしてくれる。どちらかというとき不快感情に敏感な形で、人間の感情は発達していく。1歳を過ぎると、少し嫌なことでも我慢できるようになる。この時期の子どもは、ちょうどトイレトレーニングを開始する。ひんやりする便器に座らされ、用を足すと、母親が喜んでくれる。子どもは「冷たい便器で用を足すと、大好きなお母さんが喜んでくれ

子どもの情動発達①
<ul style="list-style-type: none"> ・1歳を過ぎると、苦痛などのネガティブな感情をそのまま表出するのをがまんし、少し弱めて表出することを覚える ・3歳になると、ある状況でどの程度、感情表出を抑制すべきか、または強調すべきかに関する暗黙の社会的ルール「社会的感情表示規則」に気づきはじめる、少しずつ適用できるようになる

る。良いことなのだ」とわかり、だんだんと学習し、トイレで用を足すことができるようになるのである。「快」の感情が、母親の賞賛や笑顔により、わかってくる。子どもが発達する上で、非常に重要なことである。

3歳頃になると、どの程度で感情を表出、抑制すればよいのかが、わかってくるようになる。少しずつ社会性が出てきて、相手の「うそ泣き」も見破ることができるようになる。言葉ではいちいち言わないが、ものすごい速度で感情は発達する時期である。

4歳頃になると、共感能力が発達する。相手の気持ちを配慮し、真の気持ちとは異なる感情を、状況に応じて示すようになる。例えば、それほど嬉しくないものをプレゼントされても、喜んだふりができる。この時期の子どもは、既にいろいろなことを察知し始めているのである。

6歳になると、相手を傷つける場合は、自分の本当の感情は隠したほうが良いと思うようになる。例えば、大切な誰かを亡くして悲しんでいる親を見たこの時期の子どもは、「この人を悲しませてはいけない、自分が励まさなければいけないから、自分の悲しい感情はかくして、明るい表情をして喜ばそう」という態度ができる。親にとっては、まだわからない年頃だと感じるだろうが、それは子どもがまだ言語化できる年齢に達していないからである。

この時期の子どもは、社会性を培い、同級生グループの中で生き抜いていかなければならないため、友だちに「本来の自分を見せてはいけない」と思った場合は、見せない。高学年は「ギャングエイジ」と呼ばれ、同性の同年代の集団の中で揉まれる、ルールを守る、そのルールの中で喧嘩をしたり、仲直りをしたりして、人間関係を学んでいくという非常に重要な時期である。そういった社会経験が、認知や知的理解、情動の発達と同時並行に進んでいると考えられている。

言語化できるのは、中学生以上になってからではないか。中学生時代は第二次反抗期もあり、自分の問題だけで手一杯である。その時期が過ぎた頃でなければ、子どもの頃のこととは語れないのではないか。私達は死ぬまで発達し続けている。情動調整、怒りや喜び、悲しみのコントロールというものも、「これで完成した」と言える段階はない。

子どもの情動発達②

- ・4歳を過ぎると、共感能力が発達し、相手の気持ちを配慮して真の気持ちとは異なる感情を状況に応じて示すようになる。自分が他者に示す感情は必ずしも真の感情ではないこと、真の感情を示すことが良いこともあることを理解してきている
- ・6歳を過ぎた子どもは、誰かが傷つきそうなときには、本当の感情を隠した方が良いことを理解し始める

子どもの情動発達③

小学生になると子どもは、家族に対してよりも友人に対して、感情表出をコントロールするようになる

発達段階によって、自己の情動調整ができるようになるが、それぞれの発達段階に達すべき課題も乗り越えなければならない

例) 乳幼児期、児童期、思春期、青年期の課題

★人間は、生涯発達し続ける

緊急支援チームの役割

学校で事件や事故が起きた場合、要請を受けてから約3時間以内に、十数名の緊急支援チームが現場に入る。まずは安全を確保し、病院に行っている生徒や保護者のケアを行なう。目撃した子どもがいる場合には、本人とその家族、教師に対して、今後「眠れなくなる」「不安になる」「寝ても夢を見てしまう」等の症状が現れる可能性があること、それは現れて当然であるということを説明して、理解を促す。被害者が亡くなった場合には、死についてどのように子どもたちに伝えるのか、お通夜やお葬式をどうするのか、お別れの会は開くのか、学校で亡くなった生徒の写真やお花をどのように扱うのかというようなことも、細かく話をしていく。亡くなった子どものきょうだいが学校にいる場合には、その子が登校しやすいように、また不登校にならないように、細心の注意を払い学校現場を安定化させていく。以上のようなことが、緊急支援チームの主な役割である。

子どもが死を体験する時の緊急支援	
場のケア	学校（教員） クラス（児童/生徒） クラブ活動の仲間 保護者への心理教育
死の教育	・心理教育 ・通夜や葬儀、お別れの会 ・写真やお花の扱い

言葉がけの難しさ

亡くなった事実を、他の生徒たちにどのように伝えたらよいのか。学校現場はこういったことに不慣れであるため、緊急支援チームがサポートを行なっている。第一に配慮すべきは、遺族の気持ちである。混乱している遺族に丁寧に聞き取りをし、他の生徒たちにどのように伝えるか、丁寧にたずねる。

教員や保護者の多くは、遺族への接し方に悩み、遺族自身もどのように触れてほしいか、触れてほしくないのか、とても敏感である。まずは、二次被害となる安易な言葉がけをしないなどの、心理教育が必要である。よく校長が作るスピーチに「残念ながら、〇〇さんが亡くなりました。あんなに元気だった〇〇さんが亡くなったなんて、信じられません。こんな形で命がなくなるのは、本当に残念でなりません。〇〇さんや遺族のためにも、ここにいるみんなが元気でがんばることが大切です」といったものがある。もし遺族がそのように伝えてほしいということであったのなら、それで良いのかもしれないが、遺族が現実を受け入れられている事例が非常に少ない中で、「天国で見ている」「お空で見ている」といった言い方をして、死を早く次のステージに移らせようという

ご遺族への支援
・ご遺族の気持ちを第一に配慮する
・現場が混乱して大変でもご遺族の意向を丁寧に聴き尊重すること
- CRJ 隊員が細かな点に気がついて、教育委員会や学校関係者らにアドバイスできることが大事である
- 直接対応は目的を明確なものに限定

ご遺族への接し方
・教員や保護者の多くは、ご遺族への接し方に悩む
・二次被害となる安易な言葉がけの注意を含めた心理教育が必要
・よかれと思ってかけた言葉がご遺族を傷つけることがある

のは早すぎる。さらに、学校現場では「神様」「仏様」などの宗教的な言葉は使えないため、そういった言葉は使わずに死を説明する必要があるということもお伝えしている。

「〇〇ちゃんの分も、がんばらないとね」や、亡くなった子の保護者には「下の子がいるから、いいじゃない」「まだ若いから次の子が生まれるわよ」といった、恐らく「励まそう、慰めよう」と思った声かけが、遺族にとっては非常につらく受け止められる。そういった言葉かけは、避けなければならない。私は、トラウマ体験をした多くの方々に対して、人生の時間を止めてあの時に戻り、もう1回やり直すということではできないのだと申し上げている。被害者の方々もよくわかっているが、同時に私たちも「なかったことにはできない」という現実を本当の意味でわかっていなければ、言葉かけは非常に難しいということを理解するべきである。

宗教的配慮
・学校現場では、特定の宗教の考え方は提示できない
・「天国」「神様」「仏様」などは、使用できない
・個々の家庭の中では、それぞれの教えがあるのが現状である

子どもが回復に向かうために

トラウマ体験と悲嘆は、同じではない。人が死ぬと、宗教的な儀式が進んでいくと同時に、人間の食事や睡眠などの原始的振る舞いも進んでいくが、その中で人は回復していき、心の中で亡くなった人との関係性を落ち着かせていく。しかし、それでも立ち直れないということが、複雑な悲嘆、複雑性悲嘆である。悲嘆に苦しむ子どもの場合、回復に向かうための支援が難しいことがある。

子どもは、悲しんでいる姿を全面に出してこないケースが多く、一見他の子たちと同じように過ごしているため、支援が困難である。さらに「放っておいてくれ、触らないでくれ」といったサインを出している場合も、支援が困難である。きょうだい亡くなった場合、母親が悲しんでいると「自分が亡くなったほうが、お母さんはよかったと思っているのではないか」と思ったり、思っただけでも実際に言語化するには、非常に時間がかかる。または一生言語化しないかもしれない。お父さんが生きていたらこんなことをしてほしかった、死について理解できない、認めたくないといった思いもある。「お星さまになって、あなたを見ているよ」などと言った場合には、子どもは「罰を受けている」と感じ、「遠くで見ているのは、自分が悪いからお父さんやお母さんは助けに来てくれないのだ」という、まさに自己中心的な理由付けをする。非常に重症な場合には、精神疾患をきたす場合もある。

ご遺族の回復過程 — 中長期支援 —
・正常な悲嘆
・複雑な悲嘆
・悲嘆とトラウマ
<small>悲嘆の苦しみの癒し 受ける人が亡くなった人のための100の言葉 http://www.aloha-net.net/users2/sato1976/kyokoro/index.html</small>

複雑な悲嘆とは(1)
① 悲嘆期間が長く続く
② 罪責感が強い
③ 誰かを非難してしまう
④ 裁判などが終わるまで悲しむことができない

ると言われている。

悲しみから抜けられない、怒りが止まらなると訴える大人の傍らには、「感じているが言葉にならない」あるいは「自分が悪いと思っている」「自分がいても親はいろんなことが収まらないのだ」ということを、肌で感じながら言えないでいる子どもがいること、そのような子どもたちにどのように接していったらいいか、私たちは考えていかなければならない。

複雑な悲嘆とは(2)

- ⑤ 強い無力感と怒り
- ⑥ 故人のやり残した事の問題
- ⑦ 死について理解しがたい
認めたくない
- ⑧ 精神疾患をきたす

遺族というと、ひとかたまりで語られるところがあるが、きょうだいでも違いがあり、夫婦でも感じ方に違いがあったりすることは、普通のことである。また、言葉で表現できない子どもたちがいるのだということを、理解しなければいけない。表現できるツール、例えば一緒に遊ぶ、絵を描くことによって、子どもたちがいろんなことを発信してくれることを、私は臨床体験の中で子どもたちに教えてもらった。悲嘆の中にいる子どもたちについて理解することによって、子ども特有の反応や、子どもが出すサインをしっかり読み取ることができ、子どもたちを見守る周囲の大人たちの助けになるかもしれないと思い、お話をさせていただいた。本日はありがとうございました。

<参考文献>

藤森教授の講義内容に関連する文献を以下に掲載します。

- ・藤森和美編著(2001)『被害者のトラウマとその理解』誠信書房
- ・藤森和美編著(2005)『学校トラウマと子どもの心のケア 実践編
— 学校教員・養護教諭・スクールカウンセラーのために —』誠信書房
- ・藤森和美・前田正治編著(2011)『大災害と子どものストレス
— 子どものこころのケアに向けて —』誠信書房

2. 講演「家族を亡くした子どもの親として - 子育ての悩みや支援について - 」

交通事故で子どもを亡くした遺族である井上郁美さん、被害者遺族 A さん（匿名希望・女性）より、「家族を亡くした子どもの親として - 子育ての悩みや支援について - 」の講演が行われた。講演の要旨は、以下のとおりである。

〔講演要旨〕井上 郁美さん

事故の概要及び当時の状況

1999 年 11 月 28 日、東名高速道路において、酒に酔った運転手が運転するトラックに追突され、私たち家族 4 人が乗っていた車は炎上した。運転していた私、助手席にいた夫は助かったが、後部座席に座っていた当時 3 歳だった長女・奏子（かなこ）、当時 1 歳だった次女・周子（ちかこ）の 2 人は、逃げることができず焼死した。事故から 14 年 2 カ月が経つが、今でも事故について話をするのは、大人である私にとってもつらいことである。この事故は、日曜日の午後 3 時半、たくさんの車両が走っている中で起きた。偶然、反対車線を通りかかったテレビ局の中継車があったため、後ろから炎上しているトラックと私たちの車や、車の窓から出てくる私の様子が、非常に生々しい映像として撮影されることとなった。職業運転者による、常習的な飲酒運転だったということもあり、その後もこの事故が報道で取り上げられ、生々しい映像も放映されることとなった。

私は奇跡的にほとんど怪我を負うこともなく、すぐに退院できたのだが、夫は背中と左腕に大やけどを負い、3 度の緊急手術を受けた後も、何回も手術を受けた。事故の時、当時私は妊娠 8 カ月の身重であったが、奇跡的に無事だったため、お腹にいた三女は窮地にひんすることもなく、6 週間後に無事に生まれてきた。その後私たちには、幸いなことにさらに 3 人の子どもに恵まれ、二男二女の 4 人の子どもを育てている。一番幼い四女は今春から小学校に入学する。子どもたちは、事故で亡くなったお姉ちゃんたちのことについて、親や周りの人から話を聴くことはあっても、一緒に育つということにはかなわなかった。三女は、三女でありながら一番上の子どもになってしまった。彼女に、お姉ちゃんたちがどうして亡くなったのか、いつどのように伝えたらよいのかわからなくて困っていた。当時はインターネットも発達しておらず、子ども向けの「死」に関する書籍のようなものもなかった。

遺されたきょうだいに事故の話をする事

テレビでは、テレビ局が撮影した生々しい事故の映像がたびたび流れていたが、子どもたちあまり見せないようにしていた。テレビ局が系列の局に映像を貸し出す際には、なるべく事前に連絡をいただき、どこかのチャンネルで事故の映像が流れていても、子どもたちの目には入らないようにしていた。ところが、一度だけ大きな失敗をしたことがある。ある日、自宅に取材に来た方に映像を見せてくれと頼まれた私は、安易にその映像を子どもたちが同じ部屋にいるところで流してしまった。映像の中で「子どもがまだ中にいるの！」

と叫んでいる母親の姿を見た子どもたちは非常にショックを受け、激しく泣きだしてしまいました。本当に取り返しのつかないことをしてしまったと、今でも申し訳なく思っている。普通の視聴者が見るぶんには平気なのかもしれない。しかし、遺されたきょうだい事故現場の映像を見る、写真を見るというようなことに対しては、配慮しなければいけなかったと思う。しかし当時は、何に気を付けなければいけないのか、子どもたちにどのように配慮しなければいけなかったのかについて、手掛かりはなかった。いまだに正解はないと思っている。「ちょっとそこに座りなさい。実はね」と、正座をして子どもたちに説明することが正しいのか、子どもたちが少しずつ大きくなって「ママ、どうして奏子ちゃんたちは」と訊いてくるのを待つのが正しいのか、たぶん正解はないのだと思う。夫の背中にはやけどの跡が今でも残っていて、子どもたちは普通の人の背中にはないような傷跡を見ているわけであるが、「どうしてそんな傷跡があるの？」という疑問には、あまり結びついていないようである。四女の場合は、4歳の時に「ママ、なんでパパの背中には、あんな跡があるの？」と聞いてきたため、今がそのタイミングかなと思い、「奏子ちゃん、周子ちゃんと一緒にみんなで旅行に行った帰りに、酒を飲んでた運転手が運転するトラックがぶつかって、火事が起きた。パパはあんなやけどになっちゃったし、奏子ちゃん、周子ちゃんもそれで死んじゃったんだよ」と話をした。三女も4歳の時に「奏子ちゃん、周子ちゃんは、どうして死んじゃったの？」と訊いてきたことがあった。その時、あまり力を入れていろいろなことを話そうとしても、たぶん無理だったと思う。その時も、少しの情報を伝えたら「ふーん、じゃ、もう寝るね。おやすみなさい」と言って、寝てしまった。たぶん、今はそれ以上聞きたくないというサインだったのかなと思っている。この問題は本当に難しい。後から生まれてきた子どもたちは、その事故について一切理解していないのである。その場合に、事故についてどこまで伝えたらよいのかについて、いまだに私もよくわかっていない。

同じ体験をした子どもとの交流の重要性

私たちは刑法改正の署名活動、各地での講演を行なってきたが、そこに小さな子どもたちも連れて行った。行った先で、同じような境遇の家族と知り合うようになった。その中で、あることに気づくようになった。大人も同じような被害体験をした人と話をすることによって「今の自分の状態は、そんなにおかしなものではないのだ」と思えるのだが、それと同様に子どもたちもそう感じているのではないかということだ。子どもたちは、母親や父親に悩みを打ち明けることは、あまりしないのかもしれない。しかし同年代の子どもであったら、一緒に食事をしたり、遊んだり、テレビを見ている中で、何か話をしているようだなということが見えてきた。年代が同じような子どもたちは、本当に仲良くなって、大人たちは大人たちで盛り上がりつつある中で、子どもたちは別室で遊んでいる。そんな場所がある中で、普段学校では言わないようなことでも話せている。とても貴重な場所となっているのだと思う。

犯罪被害者の遺族たちが集まる全国大会「ハートバンド」というものがある。各地から遺族が集まるが、その遺族の中には多くの遺されたきょうだいや、幼い子どもたちがいる。毎年、子どもたちは「また沖縄のお友達と会えた」と、盛り上がって遊んでいる。私が遺族になった時は、被害者の催し物というと、どうしても大人だけを対象としたものが多く、小さな子どもを連れてくるのはどうしても気が引けるし、ひんしゆくを買ってしまうのではないかと思っていた。大人の支援でさえもままならない中で、子どものケアまでは考えられなかったが、子どもたちも被害者遺族である。子どもたち同士が仲良くなり、亡くなったお兄ちゃんのこと、お姉ちゃんのこと、おじいちゃんのことについて、改めて自己紹介しなくても、お互いがどういう関係か分かり合える。たぶん来年も会えるだろう。被害者の集まりは、子どもたちにとって「拠りどころ」となっているのだと思う。私たちは、この子たちの会話に入っていくことはしないほうが良い。どんなことをしていたのか、詳しく訊くのではなく、子どもたちに任せておく。ただ、きっかけとなる場を提供してあげることが、大人の責務なのではないかと思う。今日出席しているNASVAも、そういった場を提供している貴重な団体であると思う。被害者遺族である子どもたち同士が出会えるきっかけとなる場が提供されることを、望んでやまない。

周囲からの言葉がけ

今回のシンポジウムに参加するにあたって、子どもたちに「今までに何か嫌なことはあったか」と質問してみた。まだ十分に言語化できない、しかも親に対してダイレクトに返事してくれない小学6年生の長男は、『「きょうだいは何人？」って訊かれるのが嫌だ。なんて答えたらよいのか、いつも思っちゃうんだ」と答えた。親にとっては、亡くなった子どもは除外したくないので、私は「6人産みました」と答えている。しかしこれから中学、高校、大学と、だんだん地元を離れていく子どもたちに対して細かい説明をさせることは、親として強要してはいけないと思っている。子どもたちの悩みに対して、親は回答を用意できない。知恵を出し合えるのは、子ども同士なのかなと思う。

特に子どもたちが面倒くさいと思っている言葉は「お姉ちゃんたちのぶんまでがんばって生きてね」というものだ。初めて会った人に「テレビで見てたわよ、こんなに大きく立派になって。お姉ちゃんたちのぶんまで頑張って生きてね」と、悲劇の主人公のようにされてしまう。これには私も抵抗を感じたし、たぶん多くの大人の遺族も戸惑うのではないかと思う。特に私の場合は、事故の6週間後に次の子が生まれたということもあったため、周りの人は普段よりも非常に喜んでくれた。出産自体はめでたいことであるが、「生まれてきたこの赤ちゃんは、お姉ちゃんたちの生まれ変わりね」と言われ「それは違うでしょ」と心の中で思った。三女は事故の直接の体験者でもあるため、私が言われる以上に言われているのかなと思う。「お姉ちゃんができなかったことまで、あなたがしっかりして、がんばってね。弟たちの面倒をみてあげてね」と言われてしまったりすることは、かなり煩わしいのだろうなと推察している。

我が家は子どもが好きなので、奏子と周子がもし生きていたとしても、その後も2人の女の子、2人の男の子を産んでいたかもしれないのに、周りの人が「お姉ちゃんたちを亡くしたから、あと2人出産なさったのね」と、まるで算数かのように扱われてしまう。一人ひとりの人格を個別に見ないといけないところを、「遺されたきょうだい」「生まれ変わり」「お姉ちゃんたちの分まで」という部分で見てしまい、一人ひとりの自尊心を傷つけるような言葉を発せられる。このような言葉は、子どもたちにとって非常に傷つく言葉ではないだろうかと思っている。

【講演要旨】被害者遺族Aさん（匿名希望・女性）

事故の概要及び当時の状況

平成10年4月24日、高校2年生だった長男拓也は、弓道の部活が終わった後、学校前の横断歩道を横断中に、わき見運転の自動車に20メートルも跳ね飛ばされ、亡くなった。2週間、病院の集中治療室でがんばって生きてくれたが、一度も目を開けることもなく、5月8日に天国へ旅立って行った。私の心と体は、その5月8日で止まってしまった。お腹はまったく空かず、食べなくても平気だった。それまで毎日行なっていた洗濯、掃除、そういった日常的事が、何もできなくなった。夜も、睡眠薬なしでは眠れなくなった。1日中椅子に座り、拓也が帰ってくる時刻には、玄関を見続ける、そういう日々を送っていた。

拓也の姉は、当時18歳だった。始発の電車に乗らないと1時間目の授業に間に合わないほど、遠方の学校に通っていたが、娘は毎日5時に起きて、自分のお弁当を作り、洗濯をして学校に行くようになった。もうすぐ四十九日が来るという時に、娘の担任の先生から電話があり、「娘さんが教室で倒れて病院に運ばれた。入院の必要があるのですぐに来てください」と言われた。それまで私は加害者でもないのに、車に乗るのが怖く、ずっと家にいる状態であった。その日は夫もおらず、1時間以上かかるその病院まで必死になって運転して行った。駐車場では担任の先生が待っていた。その時、先生に言われた言葉で、私は頭をハンマーで殴られたかのように正気に戻った。「娘さんは『私が入院すると、お母さんは精神病院行きになるので、入院はしない』と言っている。今、娘さんは薬を取りに行っているが、お母さんがどうやって運転してくるか心配で、何度も病院とこの道路を行ったり来たり、何往復したかわかりません。」それまで私は、拓也を産んだ私が家族の中で一番つらいし、苦しいと思っていたのだが、先生のその言葉で「家族はみんな一緒なのだ」ということに気が付いた。娘は、私の前では泣いたことはなかった。たぶん2階の自分の部屋で泣いていたのだろう。親戚のみんなに「お父さんとお母さんを頼むよ」と言われ、ものすごい重圧が肩にかかっていたのだと思う。何も言わずに四十九日までの間家事をこなしてくれた娘に、私はいまだに頭が上がりずにいる。

遺されたきょうだい（姉）の様子

今日ここで話をするに当たり、いろいろなことを思い返した。亡くなった拓也は、とても面白い子であったが、姉の性格は反対で、寡黙な子であった。手がかからず、明日が遠足だという時も、親が言う前に自分の枕元にはすでに明日の準備ができていた。手がかからなかったぶん、私は拓也を亡くした後、自分の娘がどんなことを考えて、何をしているのか、考えてあげる余裕がなかった。当時私は43歳で、娘に「お母さん、もう一度頑張っ
て子どもを産んで」と言われたが、私は「もう赤ちゃんは産めないけれども、お姉ちゃんが結婚して赤ちゃんを産む時は、お母さんが助けるから、たくさん産みなさい」と言った。その言葉どおり、娘は結婚して、今は4人の子どもを育てている。1度だけ、社会人となった娘から「お母さん、私が死んだほうがよかった？」と訊かれたことがあった。その時は突然だったため、質問に答えることができなかったが、普段は弟のことを言わない子なので、何か私の行動がいけなかったのかと悩んだ。

命の大切さを伝えること

私は、生きていうちに何かしないと、あちらに行った時に拓也に会わず顔がない、そう思って、8年前に三重の高校生と一緒に、アスト津で「生命のメッセージ展」を開いた。準備をしていた時、いつもは何も言わない娘が初めて手紙をくれた。手紙には、弟への思いが綴られていた。

今、私には4人の孫がいる。拓也と同じ2月12日に生まれた長男は小学3年生となり、学校で詩の暗唱をしているらしく、私はよくその練習に駆り出されている。私の命がある限り、16年間しか生きられなかった命、一所懸命生きていた命、大切な命があることを伝えていきたい。去年、初めて娘に「今まで本当につらい思いをさせてしまって、申し訳なかった」と言うことができた。その言葉が出るまでに15年かかったが、それを言えたことで、氷が溶けていくように娘もいろいろ話をしてくれるようになった。自分から言えて良かったと思う。今日藤森先生の話をお聴きして、この話を16年前に聴けていたら良かったのと思った。これからも事件、事故は起こると思うが、こういったシンポジウムはその意味でも重要なのだなど、あらためて勉強させていただいた。本当にありがとうございました。

3. パネルディスカッション「子どもの頃に交通事故で家族を亡くすということ」

遺族の講演の後、休憩をはさみ、子どもの頃に家族を亡くした方3名より、「子どもの頃に交通事故で家族を亡くすということ」について語られた。その後、井上郁美さんと被害者遺族Aさんからは、親の立場としてお話を聴いた感想が述べられ、最後に藤森先生との間で、質疑応答が行われた。

子どもの頃に交通事故で家族を亡くした方のお話 中谷 文香さんのお話

私の父は、私の弟が生まれてすぐに亡くなった。そのため、家族4人が映っている写真は1枚もなく、父と弟と私の3人が写っている写真しかない。事故が起こった時、私は2歳だったため、何も憶えていない。ただ小さな頃から、仏壇と父の遺影があった。「父が亡くなって悲しいと感じた」ということではなく、だんだんと「父は死んでいて、ずっと仏壇の中にいるんだな」という感じを、なんとなく受け入れていったように思う。

幼稚園に入った頃、同じクラスの子に「文香ちゃんの家が小さいのは、お父さんがいないからなんでしょ」、「車が小さいのもそういう理由からなんでしょ」などと言われたが、なぜそう言われるのかがわからなかった。私は何も悪いことはしていないし、父がいたことも憶えていないため、父がいないことが普通ではないということもわからなかった。どのように反応してよいのかわからなかったが、その子と同じ小学校に行きたくなかったため、自宅からは少し離れた私立の小学校に行った。

小学校では、父がいないことで差別するような子はおらず、のびのびと受け入れてくれた。その後中高一貫校に通ったが、周りが裕福な家庭ばかりであったため、頻繁に父親の職業を訊かれて困ったが、なにも恥ずべきことではないので、私はちゃんと「お父さんは、私が2歳の時に交通事故で亡くなった」と言っていた。すごく衝撃的だった出来事がある。中学校2年生の時に、私の制服が短くなり、先生に新しい制服を買うように言われた。「父親がいなくて貧乏だろうから、新品は買えないだろう」ということで、バザーで中古品を買うように言われた。大人はそういうような目で見ていることは知っていたが、直接言われたことは初めてだったため、すごく嫌だった。母親にはそのことを伝え、一度も中古の制服は買わずに、ずっと新品の制服で登校した。

父親がいなくなるということは、一家の大黒柱がいなくなることで捉える方が多く、一番初めにみんなが思うことは、金銭面のことなのだと思う。しかし、金銭面で苦労したと思ったことは、一度もない。一番つらいのは、家族を亡くしてつらいということを理解してもらえないことだと思った。父がいないということは、たった一瞬のことではなく、ずっと付きまとうことであるが、それを「お父さんがいないから貧乏だ」というようにしか捉えない方がいることは、すごくつらいことだと思う。子どもとはいえ、恥をかかされたり、差別を受けたりしても全く何も感じないわけではないので、立ち直っていくためには、周りや家族に支えてもらいたい。

私が小さいころから、(独)自動車事故対策機構(NASVA)にはずっとお世話になっ

ており、家庭相談員の方々が私の成長を見守ってくれている。「まったく普通の家だ」と教えてくれたので、私はすごく良かったと思う。今まで（独）自動車事故対策機構（NASVA）という団体と中谷の家という個人のつながりが主で、家族ごとの交流はほとんどなかったが、最近ではそのようなつながりを持つ機会を設けて下さり、家族同士の交流ができるようになった。私はその活動が世間にもっと周知され、私たちのような被害者の家族がもっともっとながっていければ良いなと思っている。

仲沢 悠希さんお話

平成5年9月16日、私は4歳、姉は6歳だった。その日の夕方、姉の自転車に2人乗りをして友人宅から帰る途中、急な坂でブレーキが効かず、止まった時に少し道路に出てしまったところを、右から来た車にひかれた。姉は亡くなり、私も頭蓋骨陥没骨折、脳挫傷など重傷を負ったが、奇跡的に助かった。

当時、事故のことが新聞に載ったからか、全く知らない人たちも「かわいそうに、大変だったね」といった慰めの言葉をかけてくれる人、逆に「賠償金がたくさん出たんじゃないか」といったことを言う人たちもいた。小学校に入り、私はコミュニケーションがうまく取れない人間だということがわかった。人と話すことが苦手で、そのせいか2年生か3年生の頃、クラスメイトに無視されるなどのいじめにもあった。母は、「無理して学校に行かなくてもいいよ」と言ってくれたが、1人であることに慣れてしまっていたせいか、「大丈夫だよ」と言って学校に通っていた。2年生か3年生の時、クラスメイトの保護者の方に「あなたを助けるためにお姉さんは死んだのよ」と言われた。慰めの言葉だったのだろうが、私はあまりその言葉を気にしなかった。気にしないことが、私なりの自己防衛になっていたのかもしれない。しかし、その言葉は、私の心の奥の箱の中にいろんな出来事の1つとして蓄積されていった。

姉が死んでから、母は自宅でお酒を飲むようになった。酔った勢い、または私が悪いことをして怒られている時の勢いで、「なんでお前が生きてるんだ」というようなことを何回か言われたことがあった。私は物忘れがひどく、ついさっき言われたことを忘れてしまったり、2つのことを同時にできなかつたりと要領が悪く、そのせいで母をイライラさせることもよくあった。「役立たずな私。」そんな自分が嫌だった。いろいろなことが心の箱に溜まり、その箱に入りきらなくなって爆発したのか、小学5年生の時から、私は自分の髪の毛を抜くという自傷行為に走るようになった。6年生になって、そのことに弟が気づき、弟が母に伝えた。母に「どうしてこんなことするの？」と聞かれたが、私にはなぜ自分がそんなことをするのかわからなかった。心療内科に行ったが、心療内科の域ではないと言われ、地元の総合病院の精神科に通うようになった。

中学校に上がり、ほかの学校からも入学してくる子もいて、環境ががらっと変わったせいか、学校生活になかなか馴染めず、ストレスが溜まり、1年生の2学期の頃には頭のぼぼ

半分の髪の毛がなくなっていた。それでも普通に学校に通っていたが、ヒソヒソと「なんであんな頭なんだろうね」といったことを言われていたと思う。中学校では、吹奏楽部に所属していた。地区大会が近づいた頃、夜寝ていると、母が酔っ払った状態で私のところに来て、泣きながら「大会に出ないでくれ。たくさんの方がいる前で、そんな頭で出ないで欲しい。お母さんが他の人にどんなこと言われているか、知ってる？他の子のお母さんに『悠希ちゃんの頭どうしたの？病気？』って言われているんだよ。学校の先生にも『親の愛情が足りないんだ。死んだお姉さんばかり追いかけてるから、娘さんはあんなになったんだ。』こんなこと言われているお母さんの気持ちが、あんたに分かるか」と言った。私は、母を傷つけていた、自分がしたことで母をこんなに苦しめていたのだなと思った。結局、1年生の時の吹奏楽の大会には出場しなかった。母のその言葉を聞いてから、自分の姿がものすごく恥ずかしいものと思うようになり、中学1年生の3学期は、学校にまったく行けなかった。不登校の間にリストカットもするようになった。刃物を使うというよりは、自分の爪で血が出るまで自分の腕をかきむしることが多かった。その時の傷跡は今も残っている。

そんな状態であったが、幼稚園の時からずっと一緒だったクラスメイトの1人がとてもよくしてくれた。「学校おいでよ」と誘ってくれて、母はもちろん、その友人のおかげで学校に行けるようになった気がする。ただ、髪の毛がないのでバンダナをかぶって登校する許可をもらい、中学2年生から学校に行くようになった。その友人とは、今でも仲良くしている。中学2年生の時、精神科からもらっていた精神安定剤を、30錠ほど一気に飲んだことがあった。母に叱られて、気分も沈んでいて、役立たずの自分に嫌気がさして、死んでしまいたいという気分から、一気に飲んだ。そのために1日中寝ていても、母は何も言わなかった。その後、精神科の先生に「精神科の薬では死ぬことはありません」と言われた。また、中学時代は精神科の雰囲気嫌いで、卒業するまでの間、児童相談所にカウンセリングを受けに行っていた。

高校に入学しても、バンダナ登校は認められたが、小中学校と違い、一気に生徒数が増え、またも環境に馴染むのに少し時間がかかった。私を知らない人たちは「なんでバンダナをかぶっているんだろう」と噂する人もいた。しかし、不登校時に仲良くなった友人が同じクラスだったため、気を紛らわすことができ、なんとか慣れることができた。高校に入ってから、病院へ通うことはなくなったが、感情の起伏が激しく、ちょっとした喧嘩で頭に血が登り、弟を殴ったり、首を絞めてしまったりと、ひどいことをしたこともあった。それ以外は何事もなく、仲の良い友人も少し増え、卒業するまでの間はパソコンや簿記の検定を取ることに没頭していた。集中できるものがあつたから、落ち着いて生活してこられたのかもしれない。

高校を卒業後、私の将来を考えた母が、私の事故の自賠償の支払いをしてもらおうと決めた。事故の相手方に連絡をして、なんとか話が進むようになり、支払額が出たが、他の人に相談した時に「少なくないか？」と指摘され、インターネットの弁護士無料相談に相

談した。その弁護士に会いに行った時に、私は「娘さんは高次脳機能障害ではないか」と言われたが、初めて聞く言葉だったため、母と首をかしげた。母とその障害のことについて調べると、私の症状が色々と当てはまることがわかった。「言われたことをすぐに忘れる」「2つのことを同時にできない」「コミュニケーションに問題がある」などである。しかし、地元の青森ではその障害を検査する病院はなく、埼玉県にある国立リハビリテーション病院で検査を受けたところ、軽度の高次脳機能障害だと診断された。私は、自分を単なる役立たずな人間だと思っていたが、それは障害のせいだったことがわかり、完全ではないが心が少し軽くなった。母が私に「ごめんね」と謝ってくれた時は、涙は出なかったが、心が熱くなった。その後、裁判は和解で成立し、今に至っている。

高校卒業後、色々な仕事に就いてきたが、どの仕事でもバンダナをかぶって通勤していた。小学校5年生のあの時から、今も髪を抜くことをやめることができない。抜き過ぎてしまったため、もう髪が生えてこないところもある。リストカットはやらないようになってきた。前職を辞めて1年になるが、なかなか良い仕事に巡り会えずにいる。

今までの人生では、悲しいことや辛いことがいろいろあったが、一番幸せだなと思うことは、やはり「生きていたこと」だと思う。私は姉と一緒に事故に遭ったが、助かって今もこうやって元気に生きている。それは家族、友人、他にもたくさんの人に支えられてきたから、ここまで生きてこられたのだ。来週、私は25歳になる。姉がいなくなって21年目になる。私の一番の目標は、生きること、姉の分も生きるつもりなので150歳近くまで生きるつもりだ。まだまだ先は長い。その間に、自分の持つ夢を叶えられるといいなと思っている。そして、今まで支えてくれた人たちに、少しでも恩返しをしていきたいと思っている。これからもたくさんいろんなことがあると思うが、前向きにゆっくりと、焦らず生きていこうと思う。ありがとうございました。

坂井 翔一さんのお話

私は、去年上京して、現在は（公財）交通遺児育英会の寮で生活している。私が事故で父親を亡くしたのは、平成18年だった。当時私は小学6年生で、中学受験のため塾に通っていた。帰宅は10時や11時になることがあったため、父親が車で迎えに来てくれていた。事故が発生した時、母から塾に電話があり「今日は用事ができたので、電車でなるべく早く帰ってきてくれ」と言われた。9時の電車に乗り、駅に着くと母はおらず、知り合いの人が私の弟と一緒に車で迎えに来てくれていた。連れて行かれたところは、葬儀場であった。私は「誰かが亡くなったのだな」と思った。中に入ると親戚一同がいて、そこで初めて母に父が亡くなったことを告げられた。最初は「は？」という感じだった。叔父が父の顔にかぶさっている白い布を取ってくれた時、父の表情は普通に眠っているといった感じであった。死んだと言われても、本当に死んだのかという様子で、全く信じられなかった。

通夜、お葬式、火葬などが終わった後家に帰ると、初めて母から事故の状況を聞かされ

た。父は学校の教師をしており、帰宅中片側二車線の国道をバイクで走っていた。路肩に大きなトラックが違法駐車しており、運転手は近くのラーメン屋で食事をしていたそうである。そのトラックに父のバイクが突っ込んで亡くなったそうである。病院に運ばれたが、母が到着した時には、父は呼吸器を着けられていたが意識不明の状態であった。母は呼吸器を外してよいかと医師に聞かれ、母はそのことを承諾して、父は亡くなったということである。父の事故は新聞でも報道されたが、その当時の状況は私にとって他人事のように感じていた。

私自身は、葬儀の次の日も登校し、普通に生活していた。学校に行くと、「大丈夫か？」と心配してくれる友人もいたが、その中の 1 人が「大丈夫かと聞いても、俺たちにはわからないのだから、そんなことは絶対に訊いたらだめだ」と言ってくれて、そう言ってくれたことが一番うれしかったことを憶えている。「大丈夫か」などと訊かれて反感を持っていたため、「わからないのだから、言うな」という言葉は、一番ありがたかった。

受験も終わり私立中学校に入った。事故のことや、自分が片親だということを知っている人は 1 人もいなかった。本当に親しい友人には、事故のことを言ったことがあるが、それ以外の人は何も言わずに、高校 3 年生まで普通に生活していた。そのせいか、別に嫌がらせされることもなく、嫌な思いをさせられたこともなかったが、時々「お父さんの職業は何？」と訊かれて、答えに詰まったことがある。私は何も言わないと決めた。たいして親しくもない友人に、いちいち言う必要もないと思った。私は「高校で物理を教えていて・・・」と答えていた。本当は「教えていた」と過去形で言いたかったが、そうやって何か訊かれることが面倒くさかった。父が亡くなった時は 60 歳であり、ちょうど定年だったこともあって過去形にしても別に変ではなかったのだが、そういった不必要なことは別に言わなくてもいいかなと思った。しかし、中高 6 年間で非常に傷ついたことが 1 度だけあった。「僕と弟と母親では、お米が食べきれない」といったことを友人に言った時に、その友人に「あれ？お父さんは？」と訊かれ、「父は亡くなった」と答えるしかなかった。その時に「やはり自分には父親はいないのだな」と思った。

私が入学した私立中学校は、実は父親が定年退職後の再就職先として希望していた学校であり、母が「あなたがそこに入学したのだから、よかったじゃない。あなたのことは、きっとお父さんが見守っていてくれるよ」と母に言われた時に、子どもながらに納得したようだった。そのせいか、特に精神的にまいるといったことはなく、普通に生活してきたように思う。東京に出てこられたことも、(公財)交通遺児育英会の寮に入れたこと、奨学金を借りられたことが大きく影響しており、やはり父親のおかげだと思っている。

父親にいて欲しかったなと思ったのは、やはり大学入学時であった。友人が「大学に合格した時、父親が喜んでくれた」と言っているのを聞いた。「やはり、自分の息子が大学に合格したら、父親は喜ぶよな」と笑ってごまかしたが、自分も父親と一緒に合格発表に行きたかったなと思った。私がこうやって過ごしてこられたのも、母の言葉や父への感謝の気持ちだったのではないかと思う。

親の立場からお話を聴いて 井上 郁美さんのコメント

中谷さんは、お父さんが亡くなったことを周囲に言っていたが、坂井さんは限られた人だけにしか言わなかった。個人の気持ちと状況によって、正解はないのだなと思った。周囲の質問に対して、模範解答はない。その中で、父親の職業を訊かれた時の坂井さんの対応に関する話は、貴重な話だったと思う。嘘をついているわけではなく、その程度の情報を与えるだけでよいとすると、そういった答え方ができると思う。

中谷さんのように、お父さんがいないということだけで「経済的に困窮しているのだろう。ちゃんと学校に行けているのだろうか。制服は新品を買えるのだろうか」といった失礼なことまで、一人前の大人が口にしてしまっている。たぶん良かれと思って口にしてることが、実は当事者をととても傷つけているかもしれないということに、もっと大人たちは敏感にならないといけない。とりわけ若い人たちに接する学校関係者には、注意してもらいたいと思う。子どもが家庭にいる時には、事情がわかっている家族に取り囲まれているが、学校にいる時には、先生が良かれと思って言った言葉や、もしくは周囲に気を遣って言った言葉によって、当事者である子どもが傷ついてしまったという事例が、よく起きているということを耳にしている。飲酒運転で妹を亡くした大学生に大学教授が「飲酒運転は誰しもやってしまうことだから、気を取り直してがんばるように」と言ってしまったため、その大学生は大学に通い続けることができなくなってしまったという話を聞いたことがある。そういった信じられない言葉を、周りの大人から発せられている。

仲沢さんのお話はとてもまとまっていたが、ここまできちんと整理をして話をするまで、どれほどの労力が必要だったかと思う。私が初めてお会いしたのは、悠希さんがまだ中学生の頃であったが、その時私はまだ高次脳機能障害という病名を知らず、極めて珍しい病気なのかなと思っていた。その後、他の被害者遺族でも、一緒に事故に遭って高次脳機能障害に陥り、事故から数年経って診断がついた事例もあり、広く知られるようになってきた。仲沢さんと一緒に話をしても、2つのことを同時にできないということを感じ取ることはできない。事故の後遺症によるものであったということは、家族であっても気がつきにくい。しかしそのことに周りの人がもっと早く気づいてくれていたらよかったのにと、少し残念に思う。一緒に事故に遭ってしまって、幸い命は助かった。その時の一時的な被害は回復するかもしれないが、実は高次脳機能障害のような複雑な病気が潜んでいるということを、交通事故の関係者に知ってもらい、早く診断をつけてもらいたいと思う。早く診断がつくことで、本人が「自分は役立たずな人間なのだ」と思うことから、もっと早く解放されるのではないかと思う。

坂井さんは、いきなり葬儀場に連れて行かれて、父親が亡くなったことを告げられたということであるが、誰も事前にシミュレーションできるものではないため、何が正解か、どうすれば良かったのかはわからないが、もし周りがそういう状況になった場合、その子やきょうだいに対しては、誰がどうやって伝えるのかについて参考になるものがあると良いのかなと思う。その人が、その後苦しむことがないような選択肢があると良いと思う。

被害者遺族 A さん（匿名希望・女性）のコメント

子どもを亡くして以来初めて、子どもの頃に家族を亡くした若い方々の話を聴くことができた。日本中にはこの 3 人の方々のように、大事な家族を亡くした人がたくさんいると思う。今日このように吐き出されたことによって、同じ立場の子どもたちに「吐き出せる場所がある、SOSを送れる場所がある」と思えるような日本になっていければ良いなど思った。私は、今まで親の話は聞いたことがあったが、実際に関わった子どもたちの声を今日初めて聴かせていただき、本当に勉強になった。今日、このように吐き出し、心を少し軽くして、また夢に向かって踏み出していただけたらと思う。ありがとうございました。

質疑応答

質疑応答では、藤森先生がパネリストの方 3 名に質問を投げかけ、それに答えるという形で進められた。

藤森先生：坂井さんと中谷さんはお父さんを亡くされているが、お父さんとの思い出として、何か憶えていることはあるか。

坂井さん：私は、小さい時電車が大好きで、父にはよく電車に乗せてもらい、あちこちに連れて行ってもらった。上から電車を眺めることができるデパートのレストランで、電車を見ながら食事をした思い出がある。たぶん、今でもそのレストランはあると思うので、また行ってみたい。電車に乗る時に、後ろから押してもらったこと、凧の絵を一緒に描いたことなどの思い出もある。

中谷さん：毎朝会社に行く父のお見送りに、母に抱かれてマンションの下の駐車場まで行っていた。また、父が私を映しているビデオカメラに父の声が入っている。

藤森先生：子どもの発達段階は、保護者の年齢にも関係している。中谷さんのお母さんはとても若い頃にパートナーを亡くされて幼いお子さんを抱えてという状況であるが、そのようなお母さんと、ある程度年齢と社会経験を積んだお母さんでは、死の受け止め方や生活の有りようは変わってくると思う。家や車が小さいと言われたことは、お母さんには相談できたのか？

中谷さん：家や車が小さいことは、母がいる目の前で言われた。言われた子とは一緒に小学校に行きたくないということで、受験させてもらった。

藤森先生：「行きたくない」と思える強さがあったこと、嫌なことから離れるということも、

生きていくための重要な対処行動であると思う。自分が安全で安心だと思える場所を選んできたし、たぶん対人関係も同じだと思う。ダメだと思った人とは距離を持つし、大丈夫だと思った人には近づいていく。支えてくれた重要な人は誰だったか。

中谷さん：母だったと思う。

藤森先生：仲沢さんは、細かいところまで丁寧に説明してくれた。お母さんといろいろあったかと思うが、これからお母さんとの関係を、どのようにしていきたいか。

仲沢さん：今までと変わらずに、仲良くしていきたい。今、母とは今離れて暮らしているが、会えば普通に楽しく話をしている。母は母であり、1人の友人のような関係なので、これからもそのようにやっていけたら良いなと思っている。

藤森先生：仲沢さんはとても活動的で、自分の好きなことをきちんと選んで行なっていることが、とても良いなと思う。どうか根気強く、無理をしないでいただけたらと思う。このように檀上で話せる方というのは、知的にも高く、自分の感情のコントロールや整理も出来ている方であると思う。やはり、20歳前後あたりになってやっと、起きたことや家族のことを語れるのかなと思う。渦中の頃や、幼い頃であれば、起きたことについて整理はできないだろう。もし目の前で幼児、児童、思春期の子どもが被害を受けていたり、被害者家族に出会ったりした場合に、周囲の人間はどのようなことに気を付けなければいけないかということを考えなければならぬ。「これを言うてはいけない、あれも言うてはいけない」とマニュアル化されると、「もう声をかけられなくなる」と言う人がたくさんいる。学校に行くと、先生は模範解答を教えてくださいと言うが、模範解答というものはなく、ケースバイケースである。地理的な距離感なども影響してくる。ただ、言うてはいけないことはあるため、それは教えるが、今の大人には柔軟性が欠けているのかなと思う。被害者支援だけでなく、通常の教育現場であっても、欠けているのではないかと感じる。被害者家族の子どもの中には、先生に対して「親しくない同級生にまで、家族が亡くなった事情を説明してほしくない」と思っている子もいる。犯罪に巻き込まれた場合、犯罪の加害者である場合、自殺の場合など様々な事例があるが、その子どもには全く関係のないことである。それが子どもに降りかかってくるような接し方をされることが、よくある。今日ここで勇気をもって話してくれた体験から、私たちはたくさんのお話を学ばなければいけない。今日は貴重な意見をありがとうございました。

．まとめと今後の方向性

1．まとめ

(1) 開催について

「交通事故で家族を亡くした子どもの支援」に関するシンポジウムは、内閣府の交通事故被害者サポート事業として初めての試みであったが、約 140 名の参加を数え、大変盛況であった。一般的に交通事故被害者の大人に焦点を当てたシンポジウムは開催されることはあるが、今回のように「子どもの支援」に焦点を当てたものは非常に少なく、マスコミの関心も非常に高く、一部報道機関のニュースで日本全国に報道された。

アンケートからも大変好評であることが示されており、回答した全員が「有意義であった」と回答していることから、非常に密度の濃い、充実した内容であったことがうかがえる。特に 20 歳代の若者が「子どもの頃に交通事故で家族を亡くすということ」について自ら語った内容については、聴衆の多くが強い衝撃を受け、中には涙を流しながら聴く者もいるなど、貴重なお話であった。

(2) 内容について

シンポジウムの内容について、まず藤森和美教授の基調講演については、子どもの発達段階による死の理解や支援について、専門的な内容を一般の方にもわかりやすく講義いただいた。特に遺族や支援に携わる方からの評価が非常に高く、アンケートからも「もっと早くこのような講演を聴く機会があるとよかった」「大変勉強になった」という意見が多く寄せられた。

また、遺族からの講演については、交通事故で子どもを亡くした遺族の立場から、2 名の方にお話いただいた。交通事故によって、家族のしくみが全く変わってしまうこと、子どもを亡くすという大変な経験の中でも遺された子どもの子育ては継続しており、そのときどきで発生する悩みやつらさなど、いろいろな思いを抱えることについて、体験談をお話いただいた。遺族の方をはじめ、交通事故被害者を支援する者にとっても大変有益な情報提供がなされた。

幼い頃に家族を亡くされた方のパネルディスカッションについては、メンバー構成が大変良かったという意見が多く聞かれていた。パネリストは「父親を幼い頃に亡くされた女性」、「父親を思春期の頃に亡くされた男性」、「姉を幼い頃に亡くされた女性」という構成であり、事故時の年齢や亡くされた対象によっても思いや感じ方が異なり、それぞれに深い悲しみがあるという点について、非常にわかりやすくお話いただいた。本報告書には、当日お話いただいた内容を掲載しているが、当日のお話の中には文字だけでは伝えきれない思いがあったことを申し添える。

最後に政府の交通安全対策の紹介が行われ、本事業を含め政府による取組に関する情報提供がなされ、会場の参加者にも情報の共有化が図られた。

2. 今後の方向性

(1) 参加者について

シンポジウムについては、多くの遺族の方にお越しいただき、直接聴いていただくことが望ましいが、本年度はシンポジウムの広報の期間が短期間であったこともあり、遺族の方の参加者は予想よりもやや少なかった。シンポジウムの様子を映像化し、ウェブサイト等で視聴できるようにすることも可能かと思われるが、やはり直接聴く言葉と映像を通しての言葉では受ける印象が異なる面もあることから、できるだけ直接会場にお越しいただくほうが効果的である。したがって、今後このようなシンポジウムを開催する際には、遺族の方に広くお越しいただけるよう、広報を工夫することが重要である。

また、より多くの遺族の方にお越しいただくためには、本年度のように東京における開催もよいが、地方において開催することも有効であるため、開催地域については、今後の検討課題とする。

(2) 必要な支援について

シンポジウムにおいて、専門家やパネリストからは「周囲の何気ない一言が遺族を苦しめる」という事例が挙げられていた。特に、子どもが影響を受けやすい学校をはじめ教育現場に対する情報提供や支援の重要性については、あらためて確認された点である。また、何気ない一言については、親族や近隣の方が「良かれと思って声をかけた」事例も少なくないため、広く一般に対しても情報提供がなされる方法等については、今後の検討課題とする。

